男もすなる修験道

長澤　奈緒子

平成から令和へ年号が変わった日をわたしは忘れないだろう。吉野から熊野へ向かう途上で、その日を迎えた。「大峯奥駈道」１００kmを越える修験道である。

四月二十八日昼前、吉野入り。金峯山寺で旅の無事を祈ると土産物屋が軒を連ねる脇を抜け吉野山へ。桜の時期には遅いがハイカーたちが和やかな雰囲気だ。わたしは行く末の不安から青根ケ峰まで黙々と登る。そして標高を稼いだ甲斐もなく四寸岩山(1236m)からルートを外れ、川上村へと下る。山岳信仰の聖域である山上ケ岳（1719m）は女人結界だからだ。目印が心もとない杉林のなかを下って道の駅に着いたのは十六時頃。キャンプ場の主人が心配して車で迎えに来てくれたため暗くなる前に着くことができた。

四月二十九日は準備にもたつき七時頃にようやく出発。弥山（みせん）小屋を予約しているため、標準十三時間半の行程を行く必要がある。柏木から阿弥陀ケ森まで杉林を登り返し奥駈道に戻る。女人結界の門の前で一休みしていると、短パン姿のトレイルランナーが颯爽と走り去っていく。肌寒さを感じながら奥駈道を進む。険しい岩山が続き、大普賢岳（おおふげんだけ）（1780m）の辺りは覗谷がいくつもある。鞍部の行者還岳（ぎょうじゃがえりたけ）に

下り、また登り返す。弁天の森から弥山小屋まではブナやシラビソと苔のコントラストが美しい。十六時頃、小屋に着くなり雨音がし始めた。間一髪。かじかんだ手にストーブの温もりがありがたい。雨が小屋に叩き付ける音が一晩中続き、風雨が収まらないうちに三十日朝を迎える。霧で視界の悪いなか、合羽を着て次々と出発する人たち。わたしたちは停滞することにした。

令和元年五月一日六時半、雨天決行。最高峰の八経ケ岳(1915m)を経て、原生林のなか、雨露を浴びてみずみずしい苔の間を軽い足取りで進んだ。仏生ケ岳は霧で視界は閉ざされ、笹に覆われた道は雨でツルツルと滑る。行者とすれ違う。「写真撮らせてもらっていいですか」わたしの後方の登山者の希望に応える薄着の行者の姿が目に焼き付く。山頂からだろう法螺貝の響きが聴こえる。登り切った釈迦ケ岳(1800m)の山頂には、白い世界に釈迦如来像が凛と佇んでいた。しかし、作ってくれたお弁当を食べるつもりで深仙小屋に下っている最中に右足に異変を感じる。どうやら膝内側の筋肉を痛めたらしい。疲労と寒さも影響したのだろうか。行仙小屋までは耐えきれず、持経小屋にお世話になる。弥山小屋で隣あった男性二人に再会。新宮山彦グループが小屋番をされていて、薪ストーブとユーモラスな話しぶりに体も心も暖まった。右足は腫れて痛みはさらに強くなっていた。夫はエスケープを勧めたが、やり通せない悔しさで眠れぬまま夜が明けた。

五月二日朝、体調は最悪だったが熊野本宮大社を目指そうと決めていた。ここから本当の修行の始まり。行仙小屋まで転法輪岳、倶利伽羅岳といくつもピークを向かえ、八経ケ岳より低いはずなのに笠捨山(1353m)への登りは長い。登りきりほっとしたのも束の間、下ったとたん木の根や岩を掴み、足場を探りよじ登る地蔵岳が待っていた。踏み外せば谷に吸い込まれる鎖場。荷物と自分の体重を背負って突破する恐怖との闘いだった。地蔵岳の下山道もほぼ直滑降で緊張を強いられる。頼りはロープだけ。香精山を越えたら、停泊地、玉置神社に行くのみであ

ったが、昨日と一変して暑さと渇きで足が前に進まなくなる。最後の餓坂（かつえざか）の名前に合点がいく。この日の夜の星空は素晴らしかった。

五月三日、熊野本宮大社まで確実に行かれると心は軽かったが体は言うことをきかない。大森山さえ登れば後は下り（大まかな地図では）と思い、俯き足を引きずりながら進む。「川がみえます」夫が言った。確実に近づいている結願のときが意外にも寂しさを感じさせ、苦しみの一歩が感慨を踏みしめる一歩へと変わっていった。展望台から大鳥居が見えたときの喜びはなんともいえない。しかし、感慨に浸ることは許されず、そこからぐるりと経塚を周り激下りでようやく大斎原へ。誰かがつけた赤い印に導かれて対岸へと渡る。川底の苔に足をとられながらも眼前にみえる大鳥居に向かって進む。禊にしては過酷である。熊野本宮大社に到着できたことを感謝しながらお詣り。幸いにも川湯温泉に宿がとれ旅の余韻に浸っていると、例の男性二人がやってきて握手、健闘をたたえ合った。

「大峯奥駈道」は全五〇座を超えるそうである。険しいだけでなく、水や食料の確保が難しく、情報も乏しい。女性は珍しいらしく「新婚カップル（？）が吉野から向かっている」と人から人へ伝達されていたとのこと。当たり前にある日常や人のつながりのありがたさを改めて見つめ直す六日間だった。